

## 特集：患者への図書サービス

## 柏原市立図書館の病院サービスについて

八 幡 敏 朗

## 1. はじめに

「こちらは柏原市立図書館です。ただ今、本の貸し出しに参りました。本の貸し出しは無料です。お気軽にお越し下さい」院内放送でアナウンスすると各病室から本を借りに患者さんたちが集まってこられる。松葉杖をついた方、車椅子の方、手持ちの返却本は別々でも服装は皆さんパジャマ姿、病院サービスを通じて顔見知りになったおじいさんと話がはずむ。最近、どんな本がおもしろかったとか、お孫さんのこと、もうすぐ退院できること、「はらまき」の奥のほうから大事そうに図書館の貸出カードを取り出される。「なんと、2冊の本を30分かかって借りていかれた」・・・利用者との対話が病院貸出の特徴なのだから、これで良いのだ、これで良いのだ、などと自分なりに納得する。「毎日、長い時間を持てあます患者さんに読書の楽しみを！」とスタートした病院貸出も、昭和61年6月より平成4年3月まで、延べ登録者数286人、貸出人数1,158人、貸出冊数3,328冊、一人平均2.9冊、一回平均30冊の利用という、まずまずの成果をあげることができた。

貸出開始当時、病院へ図書館職員が本を持って出向き直接サービスを行うという事例は、東京において2、3館の報告があるだけで、欧米ではポピュラーな病院サービスも日本ではほんの少数館のみ行っているにすぎないという状況であった。そのため、準備の段階から全く手探りで進めざるをえなかった。幸い図書館内外また病院側の多大な協力もあって実現することができた。

具体的な貸出方法は、あらかじめ殺菌灯で消毒した図書、およそ500冊をブックトラックごとライトバンに積み込み、病院駐車場で降ろし、病棟へ搬入する。ライドバンは、連絡車用として以前図書館に寄贈されたものを利用。院内では、搬入した本を手に取りやすいように三段式のブックトラックに配架して、院内廊下で店開き方式により貸し出し。図書館の窓口と同様、患者さん一人5冊を限度に隔週木曜日の貸出日まで2週間の期限で貸し出しをしている。その他、リクエストを含めて図書館で行うサービスと同じ形式で行っている。また、病院に持ち込む本は、図書館のすべての蔵書の中から選び、特に病院サービス専用図書として購入してはいない。病院サービスの対象は、市立柏原病院に入院している患者さんなら誰でも、住民票が日本中どここの市であっても利用できるということにした。当初は図書館より持ち込む図書が少ないので患者さん優先にという配慮から病院職員への貸し出しは見送り、また病棟管理の都合上、小児サービスは見送るという貸し出しであったが、現在は共に貸し出している。

貸し出しには、図書館員が3名つくことで患者さんの読書相談にゆったり応じられるよう対処し、患者さんとの交流を深めながら、患者さんの資料に対する要求の把握や持ち込む図書の選書に役立つよう工夫している。

## 2. 開始までの経過

柏原市立図書館において病院サービスを始めるにいたった経過には、特殊な事情があった。

まずはじめに、市議会より図書館に対して「市

立病院入院患者に電話予約による図書の院内宅配サービスをしてもらえないか」という要望が寄せられた。そこで館内で病院宅配サービスについて調査検討および当図書館での実施の可能性を検討した。検討するなかで、さまざまな問題点を考慮した上で、入院患者さんたちに喜んでもらえる方法を模索しながら当館の実情にあったサービスを新たに考えていくことにした。その結果、病院サービスに先進的な東京都や欧米の病院サービスの事例を参考にしながら企画・原案作りに入り、その間、館内のコンセンサスをとりながら病院側と交渉した。病院側には病院サービスの意義を理解していただくことから始まり、ねばりづよく実施の方法の一つ一つを病院側との話し合いのなかから決めていった。当初、病院側との交渉こそ最大の難関と考えていたが、病院長・婦長会をはじめ職員の方々から「患者さんのためになるのなら」と、多くの注文をいただきながらも快く賛成していただけたことは幸運であった。

### 3. 貸出までの準備・特に本の消毒について

さて、公共図書館で病院サービスを始めるにあたってどうしても避けられない問題がある。図書の消毒をいかにするかという点である。消毒については、病院側、また館外からも問い合わせがあったので、保健所のドクターとも相談のうえ「図書館雑誌」1977年7月号の名古屋市立大学病院で使用していた殺菌灯消毒器（菊池論文）を参考に、密閉できるスチール書架を購入した。書架の各段に殺菌灯をつけて一定時間、病院へ持ち込むときと、持ち帰ったときの2回消毒している。本を媒体として病気の伝染を気づかれる方もあるかと思うが、欧米の図書館の報告を読む限り心配ないようであるし、実際に病院サービスを行ってみると、病院内は実に清潔に保たれているので、逆に図書館から病院に運び込む図書に対して気をつかう。この本の消毒に関して言えば、病院サービスを開始する前に想像していたものとは、大きな相違があった。しかし、そうは言っても消毒という問題には注意を払わないわけにはいかないので、殺菌灯消毒器を使うことによって、図書館と

して、病院は病院なりに、外は外なりに「この伝統的な心配ごと」に対して相応の対処をすることにした。

### 4. 病院との折衝

具体的な貸出方法を決めるにあたっては、何度も病院側と話し合いの機会を持ち、そこで決めていった。実施方法については、特に婦長会の意見を重視し、図書館側も婦長会に説明のため参加させてもらいながら病院側とともに患者の治療および病院の日常業務にさしつかえない時間・場所・方法を考えていくことにした。話し合いのなかで原案を病院の実情にあったものへ変更せざるを得なかったが、参考までに紹介すると、①ブックトラックによる店開き方式による貸し出し：院内病室巡回については、図書館の人的時間的な面に加えて、病室に外菌を持ち込む恐れはないか、また病院の通常業務にさしつかえないかという懸念のため、店開き方式へ変更。②小児サービス：サービス開始時、小児サービスについては、病院側より見送ってほしい旨の要望があったので、断念する形となった。しかし、現在では貸出場所に入院している子どもが本を借りに来るので児童書もいくらか選書して貸し出している。③その他：医学書については病院側との話し合いで原則的に持っていないことを申し合わせたか、病院サービスを実際に行っていると医学書に関する問い合わせや相談が実に多い。そこで、健康に関するハウ・ツウものについてのみ病院側の了解を得て持っていくことにした。

### 5. サービスの実際

最高96歳の方を筆頭に50歳以上の方が主に借りに来られている。開始当初、若い方の利用は婦人科の入院患者である女性が時折見うけられる程度で少なかった。しかし、最近になって若い方の利用が非常に増えてきている。病院サービスの利用層は、その時の入院患者の年齢層にとっても影響される。そのため選書には、たえずこの点に気をつけているが、なかなかむずかしい。病院サービスでは、



地域の公共図書館に来られない高齢の方が多いということもあって当然のごとく新規登録者も、貸出人数の割には多くなっている。これらの新規登録者（年配の方々）は、図書館の図書を借りるのが初めての方であり、図書館による病院入院患者への無料出張貸出に対して非常に驚かれ、また、同時に大変喜ばれている。

長期の入院患者と短期の入院患者の利用比率は2対8の割合であり、短期（約2、3週間程度）の入院患者が中心に来られている。そのため、利用者の入れ替わりが激しい。また、病院サービスを行って気づくことであるが、利用者は病室から貸出場所まで院内を歩いて来られるという点で（一番遠い病室からは約40m）、入院患者のなかでも比較的健康な方であるように見うけられる。

借りて行かれる冊数は一人あたり2、3冊程度で、貸出限度いっぱい5冊まで借りられるのは退院直近の患者さん等で、全体的には少ない。また、患者さんの中には1冊の本を数カ月かかって読まれる方もいる。これらから、われわれがふだん何気なく読む本でも、患者さんにとっては大変体力のいることを病院サービスから学んだ。

柏原市立図書館の病院サービスの特徴を一言で言うならば、準備（意見調整）に手間がかかったが、実施の面では実に手軽にできたという点にある。実際、病院サービスを始めるにあたって図書

館として購入したものは、殺菌灯とどこにでもある閉架式書架とブックトラック（院内図書展示・貸出用）各1台のみで、特に病院サービスとして新たに予算を加えたわけではなく、また、人員を増やしたわけでもない。図書館の現状で、病院というサービスポイントを一つ増やしたただけである。貸し出しが制度化した今日では、担当員が選書に頭を悩ます以外はさしたる労力を要す業務とは思われなくなった。一方、病院サービスから得られる効果は、はかりしれないものがある。たとえば、今まで利用の少なかった高齢者に集中的にサービスができる点、さらに、なによりも患者さんとの対話による貸し出しのなかには貸出管理の機械化・貸し出しのスピード化により図書館員として忘れかけている「1冊の本、1人のひとを大切にする」という基本を再確認させてくれる点である。患者さんが貸し出しに来られるたびに回復され、元気になっていく姿を見るとほんとうにうれしいし、さらに退院され、図書館の利用者として来館される姿を見ると、もっとうれしい。そういう患者さんとの対話による貸し出しのなかから、図書館員として今まで見えていなかった人の心が見えてくるというか、そういう効果が大きいように感じる。公共図書館による病院サービスがむずかしいと言われる原因は、おそらく「病院サービスに対する病院側・図書館側の不安」によるものではなかろうか。当図書館の場合も、病院サービスを開始するとき、全国的にもっと多くの実践事例があれば、より簡単に準備できたのではないかと思う。サービスを開始してはや6年を経過したが、なんら問題はおこっていない。病院サービスのアイデアを病院に持って行った時に婦長さんや先生たちが「患者さんのためになるのなら」と言ってくださった言葉が忘れられない。今でも「患者さん（利用者）のため」というその時の言葉を基本にしている。当図書館の病院サービスも、病院内に、また、市民にもやっと定着し、喜ばれるようになった。柏原市立図書館の病院サービスは、サービスの形態としてまだまだ初期の段階であり、問題点もたくさんあるのだが、その解決を今後の課題としてがんばっていきたい。